千葉県八千代市

ヲサル山南遺跡c地点

—宅地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成24年度

株式会社AHC
八千代市教育委員会

凡　　例

1．　本書は，八千代市教育委員会が平成23年度民間開発等埋蔵文化財調査事業として実施した発掘調査の報告書である。
2．　本書に収録した発掘調査は，宅地造成に伴うもので，事業者である株式会社ＡＨＣの委託を受けて実施した。
3．　遺跡名は，ヲサル山南遺跡，所在地は，千葉県八千代市大和田新田字ヲサル山590-1である。
4．　調査及び整理は，以下のとおり実施した。

確認調査　国庫補助，県費補助を受け平成23年度市内遺跡調査事業として実施した。
期間　平成24年２月９日～平成24年２月17日　面積 208㎡／2716.71㎡

本調査　期間　平成24年３月５日～平成24年３月27日　面積 144㎡

本整理　期間　平成24年４月20日～平成25年３月29日

5．　文献一覧は，第３章末にある。
6．　遺構№は，数字と記号（アルファベット）の組合せで標記した。記号は以下のとおりである。
竪穴住居跡　D　　土坑　P　　カクラン　K
7．　出土遺物及び実測図等の資料は八千代市教育委員会で保管している。
8．　本書の図版作成は，小弓場直子が行い，遺物の写真撮影・編集・執筆は宮澤が担当した。
9．　各実測図の縮尺については，原則として下記のとおりである。
竪穴住居跡…1/80　　土坑…1/40　　復元実測図…1/4　　断面実測図及び拓影図…1/3
10．　発掘調査及び整理ならびに報告書作成に際しては，関係各機関及びに内外の方々にご指導、ご協力を頂きました。記して深く謝意を表します。（順不同、敬称略）
鎮目四郎　千葉　寛　山下千代子

目　　次

目　次
凡　例
目　次
挿図目次
表　目次
写真図版目次

第１章　調査経過及び概要……1
第１節　調査にいたる経緯……1
第２節　調査の概要……1
第３節　遺跡の位置と周辺遺跡……2
第２章　調査された遺構と遺物……3
第１節　竪穴住居跡……3
第２節　土坑……4
第３章　成果と課題……10
写真図版
報告書抄録

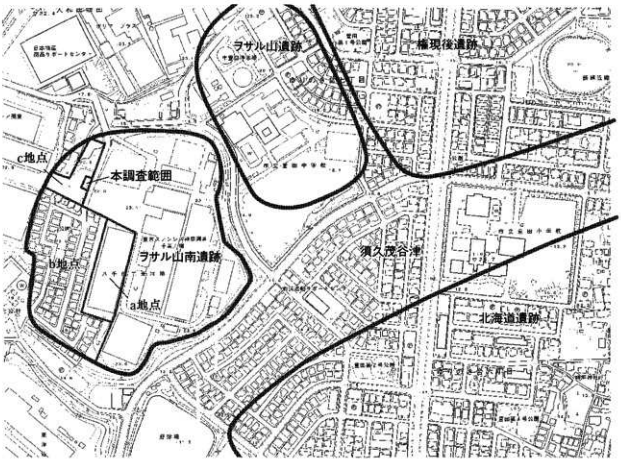
挿図目次

第１図　ヲサル山南遺跡と周辺遺跡……1
第２図　ヲサル山南遺跡ｃ地点遺構配置図……2
第３図　01D……3
第４図　005……5
第５図　05P（２）……7
第６図　01P02P03P04P……9

写真図版目次

図版１　01D遺物出土状況・01D完掘状況・05P遺物出土状況・05P完掘状況・01P完掘状況・02P完掘状況・03P完掘状況・04P完掘状況
図版２　01P出土遺物・05P出土遺物

第１章　調査経過及び概要



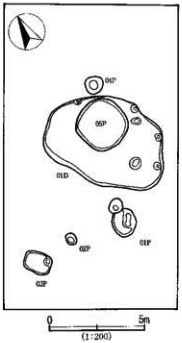
第１図　ヲサル山南遺跡と周辺遺跡（S＝1：5,000）

第１節　調査にいたる経緯

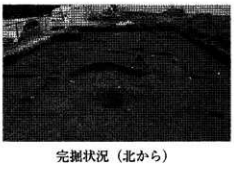
平成23年12月６日，株式会社ＡＨＣ代表取締役秋山二三雄氏（以下，事業者と略）から宅地造成に伴い，八千代市大和田新田字ヲサル山590-1外の土地について，「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の確認文書が八千代市教育委員会（以下，市教委と略）に提出された。確認地は市遺跡No.172ヲサル山南遺跡の範囲内であり，現状は畑地で縄文土器の散布も確認できた。過去の隣接地及び周辺部での調査の成果から，本確認地においても遺構が検出される可能性が高いと判断し，市教委は，事業者に対して，全域「遺跡有り」の回答を行い，造成にあたっては，発掘調査が必要となる旨を伝えた。その後，事業者及び関係者の間で協議が進められ，確認調査を実施することとなった。事業者から平成23年１月に文化財保護法第93条の届出が提出され，準備の整った平成23年２月９日～２月17日の間，確認調査が実施された。確認調査の結果を受け，再度協議が重ねられ，協議範囲144㎡については埋蔵文化財の現状保存は困難との判断に至り，記録保存の措置としての本調査を実施することとなった。

第２節　調査の概要

本調査は，調査対象地区144㎡について平成23年３月５日～３月27日の間，実施された。八千代市の平成23年度民間開発等埋蔵文化財調査事業として実施した。重機による表土除去作業を行い，表土除去作業後，ローム層上面で遺構確認作業を行った。検出された遺構については，土層観察用のベルトを適宜設定し覆土除去を行った。調査の進捗にあわせ，写真撮影，図面作成等の記録作業を実施した。



遺構検出状況（北から）



完掘状況（北から）

第２図　ヲサル山南遺跡・ｃ地点遺構配置図

撮影には，35㎜モノクロフィルム，カラーリバーサルフィルムを使用し，補助的にプローニー判のモノクロフィルム，カラーリバーサルフィルムを使用した。実測方法としては，調査区の形状に合わせ任意のグリッドを10m単位で設定し，各グリッド杭を基準とした光波測距儀による測定を中心として行った。

第３節　遺跡の位置と周辺遺跡

ヲサル山南遺跡の所在する八千代市は，千葉県北西部に位置する。都心から約30㎞の地点で，千葉市，船橋市，佐倉市等と隣接する。八千代市の地形は，印旛沼に流れ込む新川が市域中央を南北に流れ，新川と支流の桑納川により，台地が大きく３つに区分されている。それぞれの台地は，複雑な樹枝状の谷津が発達する台地となっている。

ヲサル山南遺跡は，新川の西岸の台地で，市域中央の大和田新田地区に所在する。新川から西に入り込む谷津（須久茂谷津）とその小支谷により区切られた台地平坦部に位置し，標高は約23mで，低地からの比高差は約８mである。

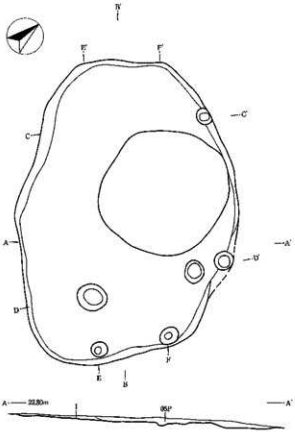
遺跡の東方には，昭和50年代～60年代に財団法人千葉県文化財センターによって調査された萱田遺跡群が展開する。権現後遺跡，ヲサル山遺跡，北海道遺跡をはじめとする遺跡群で，何れも旧石器時代～中近世にいたる複合遺跡である。権現後遺跡とヲサル山遺跡は同一の台地上に立地し，須久茂谷津を隔てた南側にヲサル山南遺跡が所在する。ヲサル山南遺跡とその周辺は，市内でも遺跡の密度が高い地区と言える。ヲサル山遺跡では，旧石器時代～奈良・平安時代の遺構が展開しているが，中でも縄文時代中期阿玉台式期の遺構・遺物が調査され，ヲサル山南遺跡との関係性が注目される。ヲサル山南遺跡も広義の意味で萱田遺跡群に含むものと考えたい。

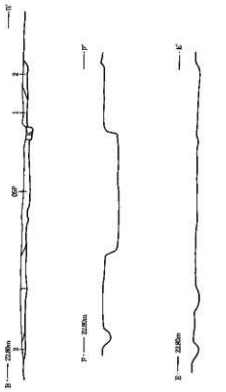
今回の調査地点は，３ヶ所目の地点でｃ地点となる。ａ地点はｃ地点の南東側に位置し，昭和62年に八千代市遺跡調査会によって調査されている。縄文時代の竪穴住居跡８軒，土坑７基，奈良・平安時代の竪穴住居跡４軒が調査されている。ｂ地点はｃ地点の南側に位置し，平成18年に八千代市教育委員会で調査されている。阿玉台式期の竪穴状遺構１基等が調査されている。

ｃ地点で検出された遺構は，竪穴住居跡１軒，土坑５基である。時期は，何れも縄文時代中期阿玉台期であり，当該期の土器，石器を得ることができた。遺物の包含層は検出されなかった。

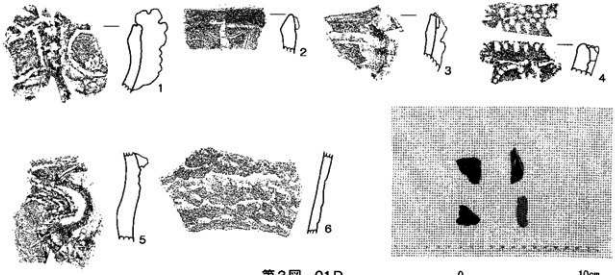
第２章　調査された遺構と遺物

第１節　竪穴住居跡





1層	暗黄褐色土層	暗褐色を主体に多量のロームが斑状に混ざる。	粘性　しまり　弱い　ややあり
2層	黄褐色土層	ロームを主体に少量の暗褐色土が混ざる。	粘性　しまり　弱い　ややあり



第３図　01D

1．01D（第3図）

検出地区　調査区中央に所在し，01P，02Pなどに近接し，05Pと重複関係にある。土層の観察からは，本遺構の方が古い。

遺　構　長軸6.3m×短軸4.2m。深さ0.1mの不整楕円の竪穴住居跡である。床はソフトロームの平坦な床であるが，やや軟弱である。壁もソフトロームの壁でなだらかに立ち上がる。掘り込みは浅く，立ち上がりを検出できない部分もあった。

付属施設　住居の壁際に浅い窪み状の小穴を6基，検出した。用途は，おそらく柱穴であろう。炉及び周溝は検出されなかった。

覆　土　基本2層に分層され，自然堆積による埋没が考えられる。

遺　物　住居全体の覆土中から小破片を中心に165点出土した。出土土器は，ほぼ縄文中期，阿玉台式土器であった。

1～4は，深鉢の口縁で隆帯に沿って角押文1列を配している。胎土中の雲母は少ない。阿玉台Ⅰb式と考えられる。5は，深鉢の口縁で隆帯に沿って角押文2列を配している。焼成は比較的良好で，雲母は少ない。阿玉台Ⅱ式と考えられる。6は，深鉢の胴部の無文部である。輪積痕を残す。焼成は比較的良好で，雲母は少ない。阿玉台式期の所産と考えられる。

また，覆土中から剥片が4点出土した。

所　見　覆土の観察と遺構の規模・形態及び出土遺物から阿玉台Ⅰb式期の竪穴住居跡と判断した。

第2節 土坑

1．05P（第4図・5図）

検出地区　調査区やや北寄りに所在し01Dと重複関係にある。本遺構の方が新しい。

遺　構　長軸2.7m×短軸2.5m。深さ0.25mの不整円の土坑である。底面は平坦なロームの面で，しっかりしている。壁もロームでほぼ垂直に立ち上がる。

付属施設　小穴等の付属施設は検出されなかった。

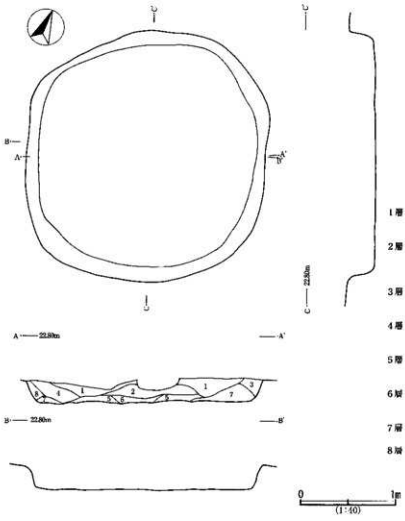
覆　土　基本8層に分層され，人為的な埋め戻しが想定される。

遺　物　覆土中から多量の縄文土器と少量の剥片が出土した。c地点の調査遺構の中では最も出土量が多かった。出土土器は，ほぼ縄文中期，阿玉台式土器であった。

1，2は，浅鉢で，1はほぼ完形，2は1/2強である。覆土下層からの出土で，1の浅鉢の上に重なるように2の浅鉢が出土した。1は，ほぼ正位で出土した。口縁は平縁で若干内湾し，内側に稜をもつ。口縁部文様帯は隆帯によって楕円の区画を施し，隆帯の内側に沿って角押文1列を施す。区画内にも角押文数列を波状に施す。区画は4単位で区画と区画の間に渦巻状の浮文を貼付する。胴部は無文である。焼成は比較的良好で胎土中の雲母の混入は少ない。2は，口唇部に刻目を施し内側に稜をもつ。外面に文様は無い。焼成は良好で雲母は少ない。

3は，深鉢胴部上半の文様帯の部分である。覆土下層からの出土で，遺構の南側壁際付近で倒れた状態で出土した。波状に横走する沈線を数条巡らし下部を隆帯で区画する。以下横走する隆帯からY字状及び円形に垂下する隆帯による懸垂文を1組にして2単位施している。隆帯の両脇には角押文1列を施し，各懸垂文の間も1列の角押文を波状に施文している。焼成は悪く，雲母は多い。4は，深鉢底部から胴部で，出土状況から3と同一個体と判断されるが，遺存状態が非常に悪く接合・復元できたのは，ほんの一部であった。水洗時に溶けてしまう状況で文様等の詳細は不明である。焼成は非常に悪く，雲母を非常に多く含む。

5～10は深鉢口縁部片である。5・6は波状口縁，7・8は平縁で，いずれもやや内湾し内側



1層　暗褐色土層　暗褐色土を主体に少量のロームが斑状に混ざり，微量の黒色土が混ざる。
粘性　ややあり　しまり　強い

2層　暗褐色土層　暗褐色土を主体に少量の黒色土が混ざり，微量のロームが混ざる。全体的に炭化粒を少量含む。
粘性　ややあり　しまり　強い

3層　暗黄褐色土層　ロームを主体に少量の暗褐色土が混ざる。壁崩壊層。
粘性　ややあり　しまり　強い

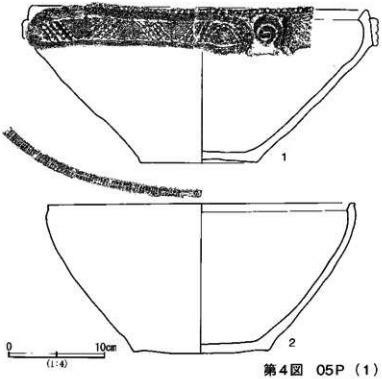
4層　暗褐色土層　暗褐色土を主体に少量のロームと微量の黒色土が混ざる。
粘性　ややあり　しまり　強い

5層　暗黄褐色土層　ロームを主体にながらも多量の暗褐色土が混ざる。
粘性　ややあり　しまり　強い

6層　暗褐色土層　暗褐色土を上体に少量の黒色土と少量のロームが粗く混ざる。
粘性　ややあり　しまり　強い

7層　暗黄褐色土層　ロームと暗褐色土が均一に混ざった層。
粘性　ややあり　しまり　強い

8層　暗黄褐色土層　ロームを上体に微量の暗褐色土が混ざる。壁崩壊層。
粘性　ややあり　しまり　強い



遺物出土状況

第4図　05P（1）

に稜を持つ。隆帯に沿って角押文１列を施す。９も平縁で内側に稜を持つ。稜線の上部に押し引きによる沈線を施し更に口唇部内側を交互刺突している。隆帯に沿って角押文１列を施す。10も深鉢口縁部片で波状口縁の波頂部である。やや内湾し内側に稜を持つ。11は深鉢胴部片，輪積痕を残し上下に隆帯が横走する。隆帯に沿って角押文１列を施す。下部の隆帯は懸垂文の一部と思われる。12～16は縄文土器片を転用した土製品である。12は浅鉢の底部で表面に数条の削痕が観察されることから砥石転用と考えられる。13～16は胴部片で，それぞれ刻みを１ヶ所或いは２ヶ所観察できることから，土器片錘と考えられる。

17・18は写真のみの掲載となる。17は打製石斧の一部と考えられる。材質はホルンフェルスである。18は焼礫。そのほか黒曜石の剥片が21点，覆土中から出土した。

所　見　覆土の観察と遺構の規模・形態及び出土遺物から阿玉台Ｉｂ式期の竪穴状遺構と判断した。

２．01Ｐ（第６図）

検出地区　調査区南側に所在し，01Ｄ，02Ｐなどに近接する。

遺　構　長軸0.72ｍ×短軸0.65ｍ。深さ0.23ｍの不整円の土坑（Ａ）と長軸1.45ｍ×短軸1.25ｍ。深さ0.72ｍの不整円の土坑（Ｂ），２基の土坑が重複している。Ａ土坑の方が新しい。

01 Ｐ Ａ　底面はソフトロームでやや軟弱。なだらかに立ち上がる。

付属施設　小穴等の付属施設は検出されなかった。

覆　土　基本３層に分層され，自然堆積と考えられる。

遺　物　覆土中から少量の縄文土器小片が出土。

所　見　覆土の観察と遺構の規模・形態及び出土遺物から阿玉台式期の土坑と判断した。

01 Ｐ Ｂ　底面はソフトロームで平坦。なだらかに立ち上がる。

付属施設　底面から更に１段掘り込まれている楕円形の小穴が１基検出された。

覆　土　基本３層に分層され，自然堆積と考えられる。

遺　物　覆土中から少量の縄文土器小片が出土。

所　見　覆土の観察と遺構の規模・形態及び出土遺物から阿玉台式期の土坑と判断した。

３．02Ｐ（第６図）

検出地区　調査区南側に所在し01Ｐ，03Ｐなどに近接する。

遺　構　長軸0.57ｍ×短軸0.48ｍ。深さ0.19ｍの円形の土坑である。底面はソフトロームで，なだらかに立ち上がる。

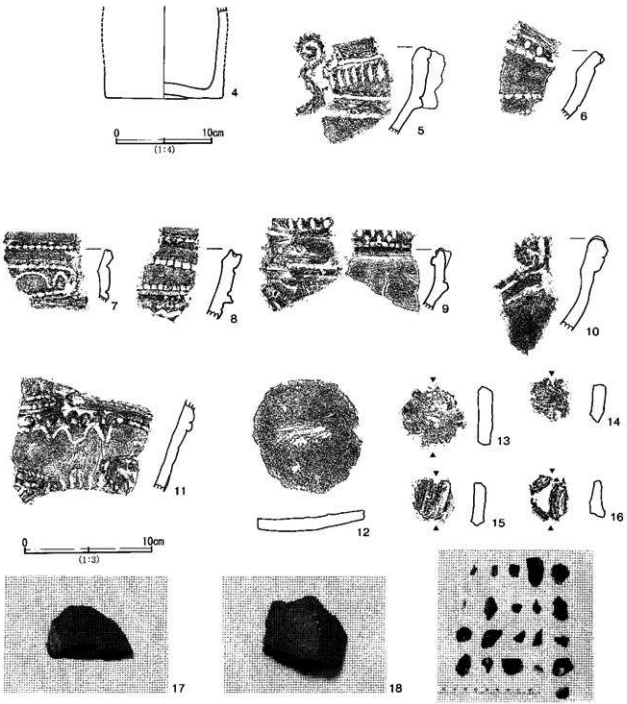
付属施設　小穴等の付属施設は検出されなかった。

覆　土　基本３層に分層され，自然堆積と考えられる。

遺　物　覆土中から少量の縄文土器小片が出土。

所　見　覆土の観察と遺構の規模・形態及び出土遺物から阿玉台式期の土坑と判断した。

遺物出土状況



第4図　05P（1）

4．03P（第6図）

検出地区　調査区南側に所在し02Pに近接する。

遺　　構　長軸1.4m×短軸1.1m。深さ0.12mの隅丸方形の土坑である。底面はソフトロームでややほぼ平坦。直線的に立ち上がる。

付属施設　南側コーナー部分に小穴1基を検出。小穴の深さは0.1mであった。

覆　　土　基本2層に分層され，自然堆積と考えられる。

遺　　物　覆土中から少量の縄文土器小片が出土。

所　　見　覆土の観察と遺構の規模・形態及び出土遺物から阿玉台式期の土坑と判断した。

5．04P（第6図）

検出地区　調査区北側に所在し01Dに近接する。

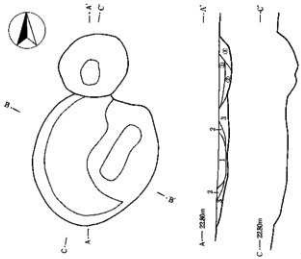
遺　　構　長軸0.57m×短軸0.48m。深さ0.19mの楕円形の土坑である。

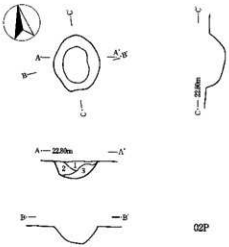
付属施設　小穴等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本5層に分層され，自然堆積と考えられる。

遺　　物　覆土中から少量の縄文土器小片が出土。

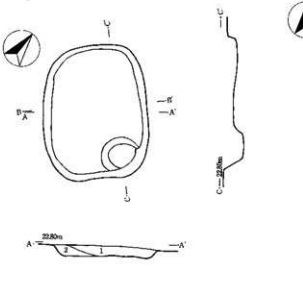
所　　見　覆土の観察と遺構の規模・形態及び出土遺物から阿玉台式期の土坑と判断した。

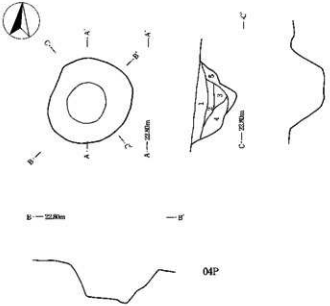




			粘性	しまり
①層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームと微量の黒色土が混ざる。	ややあり	ややあり
②層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームが混ざる。	ややあり	ややあり
③層	暗黄褐色土層	ロームを主体に微量の暗褐色土が混ざる。	ややあり	ややあり
1層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土と微量のロームが混ざる。	ややあり	ややあり
2層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土と少量のロームが混ざる。	ややあり	ややあり
3層	暗黄褐色土層	ロームを主体にしながらも多量のロームが混ざる。	ややあり	ややあり

			粘性	しまり
1層	黒褐色上層	黒色上を主体に少量の暗褐色上と微量のロームが混ざる。	ややあり	しまり ややあり
2層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームが混ざる。	ややあり	しまり 弱い
3層	暗黄褐色土層	ロームを上体に多量の暗褐色土が混ざる。	ややあり	しまり ややあり





			粘性	しまり
1層	黒黄褐色土層	黒色土を上体に多量のロームが斑状に混ざる。	弱い	弱い
2層	黄褐色上層	ロームを主体に少量の暗褐色上が混ざる。	弱い	弱い

			粘性	しまり
1層	暗褐色上層	暗褐色上を主体に微量の黒色上と微量のロームとが混ざる。	ややあり	しまり 弱い
2層	暗褐色上層	暗褐色上を主体に少量のロームと微量の黒色土とが混ざる。	ややあり	しまり 弱い
3層	暗褐色土層	暗褐色土を上体に少量のロームが斑状に混ざり、微量の黒色上が混ざる。	ややあり	しまり 弱い
4層	暗黄褐色土層	ロームを上体に少量のロームが混ざる。	ややあり	しまり 弱い
5層	暗黄褐色土層	ロームを主体に微量の暗褐色土が混ざる。	ややあり	しまり やや強い

0 1m
(1:40)

第5図　01P・02P・03P・04P

第３章　成果と課題

ヲサル山南遺跡ｃ地点の調査においては，縄文時代中期阿玉台式期の竪穴住居跡１軒と土坑５基を調査することができた。

特に05Ｐ出土の浅鉢２点，深鉢１点は，市内における該期の遺跡としては良好な資料を得ることができ，成果の一つに挙げられるだろう。

出土遺物の時期は，若干の幅はあるものの，ほぼ阿玉台Ｉｂ式期に収まるようである。八千代市内で出土する阿玉台式期の土器がＩｂ式期を中心に前後の時期に集中することが八千代市域の特徴であると思われるが，今回の調査もそのことを追認することになった。また，一般にＩｂ式期以降，他系統土器との共伴関係が注目されるところであるが，ｃ地点の出土様相は，阿玉台式の比較的ピュアな状態での出土であったと思われる。

ヲサル山南遺跡は，これまで３地点が調査され，阿玉台式期の遺構・遺物が調査されている。特にａ地点では８軒の竪穴住居跡が調査され，ｃ地点を含めると９軒の住居が検出されたことになる。小規模ながら八千代市内の阿玉台式期の中心的な集落となり得るかも知れない。八千代市で阿玉台式期の竪穴住居跡が検出されている遺跡は，本遺跡のほかに対岸に当たるヲサル山遺跡のほか，川崎山遺跡ｍ地点，桑納前畑遺跡ｂ地点などが挙げられる。これらの遺跡は，河川からやや奥まった舌状台地上に立地し，時期的にもＩｂ式期に前後し，規模も数軒単位の小規模な集落である。これらのことは，ヲサル山南遺跡の立地・時期と近似している。八千代市における阿玉台式期の遺跡パターンの一つとして捉えることができるかもしれない。

何れにしても，今後類例の蓄積を待ち，更なる検討を加えたい。また，今回，遺物に関して充分な検討ができなかった。併せて今後の課題としたい。

〔参考文献〕

八千代市史編さん委員会1991「八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世」八千代市

八千代市史編さん委員会2009「八千代市の歴史　資料編　通史編　上」八千代市

加藤修司他1984『八千代市権現後遺跡』（財）千葉県文化財センター

藤岡孝司他1986『八千代市ヲサル山遺跡』（財）千葉県文化財センター

阪田正一他1985『八千代市北海道遺跡』（財）千葉県文化財センター

藤岡孝司他1987『八千代市井戸向遺跡』（財）千葉県文化財センター

大野康男他1991『八千代市白幡前遺跡』（財）千葉県文化財センター

大野康男　1993『八千代市坊山遺跡』（財）千葉県文化財センター

大野康男　1994『八千代市権現後・北海道・井戸向遺跡』（財）千葉県文化財センター

伊藤弘一他2007「千葉県八千代市権現後遺跡―公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ―」八千代市教育委員会

伊藤弘一他2008「千葉県八千代市逆水遺跡ｆ地点・北浦畑遺跡ｂ地点・高津新田遺跡ｃ地点・西山遺跡ｂ地点・西山遺跡ｃ地点・内野遺跡ｃ地点・役山遺跡ａ地点・川崎山遺跡ｋ地点・ヲサル山南遺跡ｂ地点―不特定遺跡発掘調査報告書Ⅴ―」八千代市教育委員会

宮澤久史　2008「千葉県八千代市川崎山遺跡ｍ地点発掘調査報告書」八千代市教育委員会

宮澤久史　2010「千葉県八千代市桑納前畑遺跡ｂ地点発掘調査報告書」八千代市教育委員会

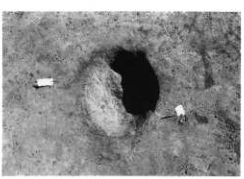
01D　遺物出土状況

01D　完掘状況

05P　遺物出土状況

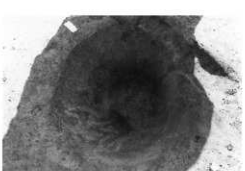
05P　完掘状況

01P　完掘状況



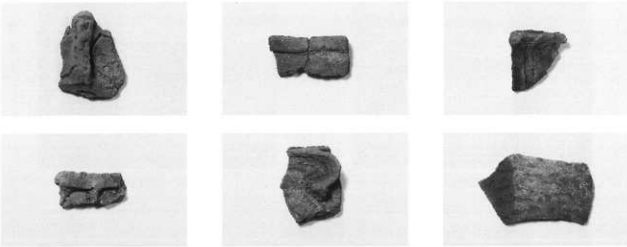
02P　完掘状況

03P　完掘状況



04P　完掘状況

図版２



01Ｄ　出土遺物

05Ｐ　出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよし　をさるやまみなみいせきしーちてん
書名	千葉県八千代市　ヲサル山南遺跡ｃ地点
副書名	宅地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告書
編集者名	宮澤 久史
編集機関	八千代市教育委員会
所在地	〒276-0045　千葉県八千代市大和田138-2　　TEL.047（481）0304
発行年月日	西暦2013年（平成25年）３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ヲサル山南遺跡 ｃ地点	八千代市大和田新田字 ヲサル山590-1	12221	172	35度 44分 11秒	140度 ５分 59秒	20120305 ～ 20120327	144㎡	宅地造成 （記録保存）

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ヲサル山南遺跡 ｃ地点	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　１軒 土坑　５基	縄文土器、石器	
要　約	ヲサル山南遺跡ｃ地点本調査の発掘調査報告書で，宅地造成に伴い，民間開発等埋蔵文化財調査事業として，八千代市が直営で実施した。 ヲサル山南遺跡は，八千代市中央部に所在し，市域中央を流れる新川から西に入り込む須久茂谷津の支谷に囲まれた舌状台地に立地する。今回のｃ地点は，その台地北側縁辺部に位置する。 検出した遺構は，縄文中期の竪穴住居跡１軒，土坑５基であった。 中期阿玉台Ⅰｂ～Ⅱ式期の集落跡と考えられ，小規模ながら，北方のヲサル山遺跡と並ぶ八千代市を代表する阿玉台式期の集落と考えられる。特に05Ｐ出土の浅鉢２点，深鉢１点は，八千代市域おける当該期の良好な資料である。				

千葉県八千代市
ヲサル山南遺跡 c 地点発掘調査報告書
平成 24 年度

発　行　日	平成 25 年 3 月 29 日
編集・発行	八千代市教育委員会　教育総務課
	〒 276-0045　八千代市大和田 138-2
	TEL　047-483-1151
印　　刷	金子印刷企画